

2020. 4. 15

畑 啓之

新型コロナウイルスの感染拡大で原油安ショック どうなる石油代替技術開発

工業や民間でのエネルギー需要が瞬間的に弱まり、その影響を受けてエネルギー使用量が急減している。原油価格はつい先日までバレルあたり 60 ドルであったものが今や 20 ドルと実に三分の一に落ち込んだ。これが世界経済に与える影響は大きい。

まず、産油国。アメリカはシェールオイルで今や世界の産油国である。しかしながら、原油価格 20 ドルでは持ちこたえることができず、多くの産油業者が倒産しかかっている。また、ロシアも同じく利益が出せない商売となる。一方、サウジアラビアでは、利益は出るが国家財政のほとんどを原油に頼っている国にとっては、国家を支えきれなくなる。オイルダラーが世界の市場から引き上げられるようなことにでもなれば、すでに大きな痛手を負っている世界の金融市場にさらに大きな激震が走ることは必至である。

歴史的に見て、新エネルギーの開発は原油の価格とのトレード・オフの関係にあった。原油価格が高い時には新エネルギー開発に予算がつき込まれるが、原油価格が安くなるとその開発が中断する。過去、この繰り返しである。化石エネルギーを再生可能エネルギーへと代替していくことが人類の夢ではあるが、この目標はしばらくは遠ざかるかもしれない。

そんな中、本日の日本経済新聞に次のような記事が載った。

バイオプラ 技術進化競う 三菱ケミ HD 牛乳から包装フィルム
住化と積水化学 可燃ごみからエチレン

<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO57981130T10C20A4TJ1000/>

この話も、新エネルギー開発と立ち位置は一緒であり、原油安はこの開発に対して逆風となる可能性が大きい。

新エネルギーや再生可能エネルギーの開発は、長期的な視野でなされるべきものである。いま、足元の原油価格の高安によって開発の歩みが変わるとするのは、本来はあるべき姿ではない。今までは、政治的判断によりこの歩みのスイッチのオン・オフが決められていたが、環境問題が声高に叫ばれるようになった今日においては、政治的判断により原油価格にとられることなく未来のエネルギー開発が進められていくべきである。これも政治決断である。